

# 日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・久野正博・柴原浅行・谷水宗美・久保典敬・西川 俊・松尾剛平・岡本楠清

## 目 的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源評価やその資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、国立研究開発法人水産研究・教育機構国際水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集を行った。

## 方 法

### 1. 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ, キハダ, メバチ, ビンナガ)の主要水揚港である和具, 浜島, 宿田曾, 紀伊長島, 尾鷲, 奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。さらに、浜島, 贄浦, 奈屋浦, 尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を行った。また、昨年度に引き続き、クロマグロ加入状況の早期把握を目的とした曳縄標本船調査(GPS ロガーを用いた漁獲実態調査)を実施した。

### 2. 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁撈通信連合会および近海漁撈通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY 情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況との関連等について検討を行った。

## 結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「平成 28 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向、魚体測定調査結果を国際水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源評価およびそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告されるので、

ここでは本県所属船の 2016 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

### 1. カツオ漁況

#### (1) 沿岸曳縄船

2016 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚量は 57.8 トンで、極度の不漁となった前年(1.6 トン)を大きく上回ったが、過去 10 年平均値(114.0 トン)の 51%にとどまり、前々年(49.1 トン)と同程度の低水準となった(図 1)。4 月下旬以降、大王崎南東以東で漁場が形成され、6 月下旬以降には熊野灘沿岸の定置網に継続して入網するなど、熊野灘へのカツオの来遊、滞留はあったものの、曳縄での漁獲は振るわなかった。主要 4 港における水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE も 53kg/隻と前年(43 kg/隻)、前々年(37 kg/隻)並みの低水準となった。水揚げがあった 4、5 月の漁獲主体は銘柄中小(1.5~2kg)、小(1~1.5kg)主体で、12 月も中小、小が主体で漁獲された。

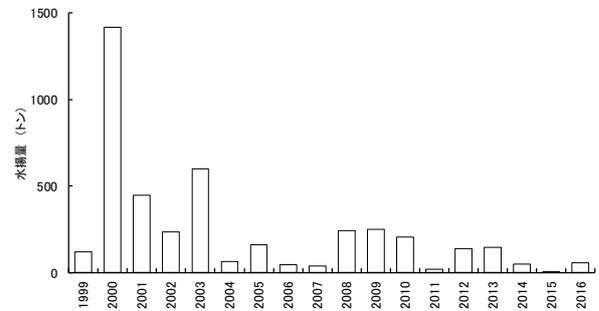


図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

#### (2) 小型竿釣船(19 トン以下)

2016 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 504.7 トンで、前年(170.4 トン)の 296%、過去 10 年平均値(353.5 トン)の 143%と近年では比較的高い水準で推移した(図 2)。三重県所属の小型竿釣船は、4 月中旬以降、八丈島~伊豆大島、銭洲、金洲、浜名湖沖を主体に操業し、主に千葉県勝浦港、静岡県御前崎港に水揚げしていた。一方で、5~7 月にかけて大王崎沖~浜名湖沖、7~12 月にかけて熊野灘沿岸域で漁場が形成され、県内漁港への水揚げ隻数も増加した。三重県主要 4 港に水揚げされた漁獲物は、5~6 月は銘柄中小(1.5~2kg)、7~8 月は中(2~3kg)

～中小, 9～10月は大(2.5～4kg)～中に特大(4kg以上), 小(1～1.5kg)混じり, 11～12月は中小～小が主体であった。また, 6月下旬から熊野灘沿岸の定置網にもカツオが入網し, 7～9月を中心に水揚げされ, 漁獲は12月まで続いた。

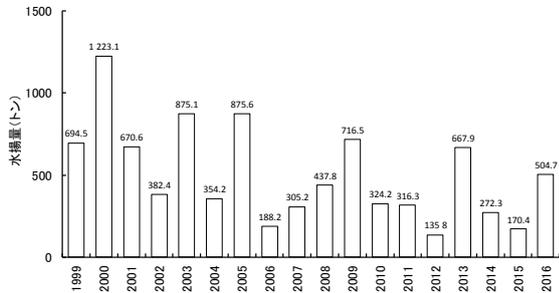


図2. 小型竿釣船によるカツオ水揚量(主要4港)

## (2) 中型竿釣船

QRY情報(船間無線聴取簿)に基づく2016年の三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量は5,856トンで,低調であった前年(6,451トン)を下回り,過去10年平均値(7,674トン)の76%にとどまり,記録が整理された1987年以降,最低の水揚量であった前々年(5,156トン)に次ぐ,極めて低調な漁況で推移した(図3)。4月までは中南海域主体の操業で,5月に入り漁場は一部北上したものの,依然中南海域にも留まり,まとまることなく広範囲で操業した。5月下旬には浜名湖沖33°～34°N, 138°～139°E等沿岸域でも操業がみられた。6月には漁場は北上したが,まとまることなく,スミス島～ハロース周辺(30°～32°N, 138°～141°E)および黒潮前線域～東北沖(33°～38°N, 142°～154°E),7月も伊豆諸島北部,黒潮前線域,東北沖(28°～40°N, 140°～157°E)の広範囲で操業した。8月には,漁場の主体は東北沖(35°～40°N, 145°～147°E),北海道東沖(41°～43°N, 152°～155°E)となり,9月には北海道東沖(40°～44°N, 148°～160°E)で漁獲もまとまったが,10月に入るとCPUEも急減し,11月初旬でほとんどの船は操業を打ち切った。

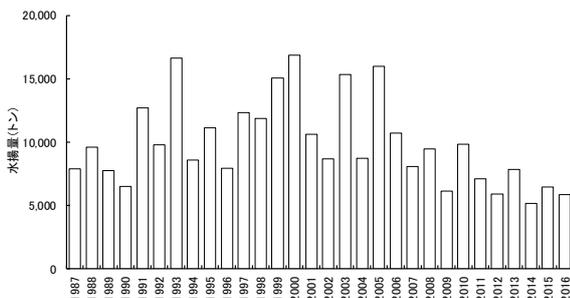


図3. 三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量

## (3) 大型竿釣船

QRY情報に基づく2016年の三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量は5,222トンで,前年(7,153トン)の73%,過去10年平均値(11,396トン)の46%と,漁獲統計が整理された1993年以降,最低の水準となった(図4)。2006年以降の水揚量の減少は,三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少(2005年:20隻,2006年:12隻)に起因するところが大きい,ここ数年はCPU E(1日1隻あたりの漁獲量)も低水準で推移している。

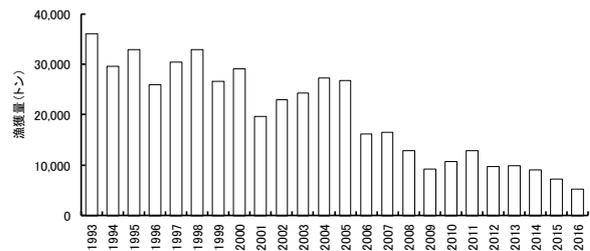


図4. 三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量

## 2. ビンナガ漁況

### (1) 中型竿釣船

QRY情報に基づく2016年の三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量は1,978トンで,前年(3,107トン),過去10年平均値(3,506トン)の水準を大きく下回る低調な漁況で推移し,過去10年では最低の水準となった(図5)。

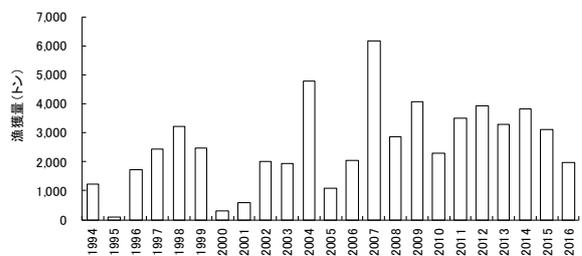


図5. 三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量

### (2) 大型竿釣船

QRY情報に基づく2016年の三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量は821トンで,過去10年平均値(3,819トン)の21%,漁獲統計が整理された1994年以降最低の漁獲水準となった前年(1,045トン)をさらに下回る極めて低調な漁況となった。(図6)。

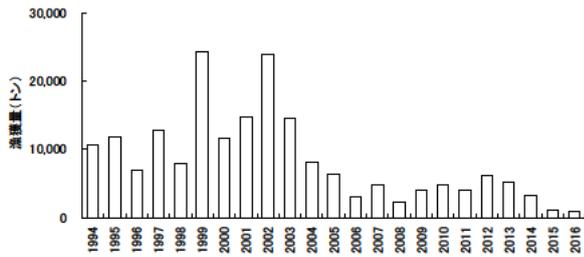


図 6. 三重県大型釣り船によるビンナガ水揚量

### 3. クロマグロ漁況

#### (1) 漁業種別水揚げ状況

三重県主要 6 港における 2016 年のクロマグロ水揚量（全漁業種）は 45 トンで、前年（14 トン）を大きく上回り、過去 10 年平均値（45 トン）と同程度で、低水準で推移していた近年の中では、2011 年と同程度の高い水準となった。水揚げの主体となった漁業種別は、まき網、定置網、沿岸カツオ一本釣りであり、それぞれクロマグロ総水揚量の 52%、32%、16% を占めた。定置網では 5 月に体重 30~70kg の中・大型のクロマグロが、8 月以降はまき網、定置網、沿岸カツオ一本釣りでヨコワ当歳魚（8 月：26~30cm, 11 月：44~50cm）が漁獲主体となった。

#### (2) クロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）の採捕状況

熊野灘沿岸域における 2016 年の養殖種苗用ヨコワ漁（曳縄）は、極めて低調であった過去 4 年（2012~2015 年）から一転し、好調な漁況で推移した。初漁は前年より 10 日早い 7 月 10 日にみられ、養殖業者の池入れ数を満たしたため、2011 年以降最も早い 8 月上旬にはほぼ終漁した。標本漁協所属船によるヨコワの活け込数は約 17,000 尾で、前年の 376% で 2011 年に次ぐ高い水準となった（図 7 上図）。採捕尾数と有漁隻数から求めた CPUE は 11.9 尾/隻で、2011 年（10.8 尾/隻）を上回る水準であった（図 7 下図）。

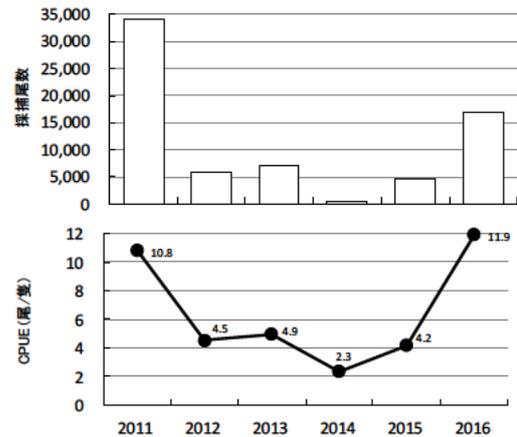


図 7. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）採捕尾数および CPUE の経年変化

### 関連報文

平成 28 年度国際漁業資源調査・情報提供委託事業報告書、国立研究開発法人水産研究・教育機構。  
平成 28 年における三重県中型・大型釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括、三重県水産研究所。